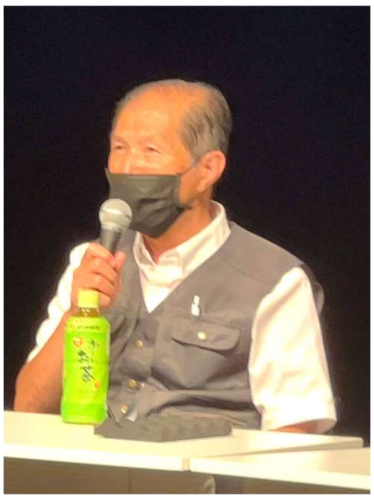
（前のページから）

自立生活センター・イルカの長位鈴子さんは、小さい時から受けた差別体験とシンポジウムへの提言、同じくインクルーシブの宮城秀明さんは、施設から地域に出たことで得た自由と人権について話してくれました。

折しも、今年2月に唐突に戦場に突き落とされたウクライナで、真っ先に障害者が取り残され、困難に直面しているのではないか、戦争の根底には優生思想があることを心に刻み、とにかく生き延びてほしいと、世界中に「連帯と祈り」を発信した藤井克徳さんの詩に込めた想いを共有しました。準備会は回を重ねるごとに、参加メンバーが増えていきました。

2001年ハンセン病国賠訴訟において原告として国の過ちを正した金城幸子さんと平良仁雄さんのお二人にも、国策による人生被害をなくすため、人権を訴える社会活動に関わるようになった経緯などを、シンポジウムで発表してもらうことになりました。戦後沖縄がおかれた過酷な米軍統治下で、ハンセン病者や障害者がどのような立場におかれたかを、ジャーナリストの山城紀子さんに報告をしていただき、現在のコロナ禍で、全国のハンセン病療養所が抱える問題を研究する沢知恵さんにも登壇していただくことになりました。

このようにして、7月18日のプログラムが出来上がりました。



午前中、映画「夜明け前のうた」上映。午後は、シンポジウム開会式主催者挨拶（日本精神衛生会理事長・小島卓也、沖縄実行委員会・宮城秀明）。第1部「時男さんの国賠訴訟に連帯する」（伊藤時男、藤井克徳、司会・小浜日登美）。第2部「ハンセン病の国賠訴訟に学ぶ」（金城幸子、平良仁雄、山城紀子、沢知恵、司会・高橋年男）。第3部は、パネリスト全員が登壇して、クロストークと会場との意見交換。

サイドイベントとして、伊藤時男さんの絵画と詩の展示会（7月9日～17日）を開催し、17日には、主催者の中心メンバーなど25名で、沖縄北部の私宅監置小屋とハンセン病療養所愛楽園を訪問しました。

今回の企画全体の参加者は、およそ150名でした。

2022年8月10日　記す